平成十八年度　駒澤短期大学仏教科彙報

◇平成十七年度　短大仏教科開講科目

基礎仏教学　木村　誠司

『般若心経』をテキストとし、前期は様々な角度から考察を加えた。後期は注釈書を用い、特に空海の『般若心経秘鍵』を参照した。

宗学研究　角田　泰隆

前期は、曹洞宗の基本的事柄について概説、後期は、両祖（道元禅師・瑩山禅師）の伝記をたどりながら、その基本的な教義について講義。

禅学研究　奥野　光賢

禅学特有の用語の解説を中心としながら、慧能に至るまでの中国禅宗史を概説。その上で『六祖壇経』を講読して、禅思想の思想的意味について考察した。

仏典研究Ⅰ　木村　誠司

袴谷憲昭『仏教入門』を中心とし、インド・チベット仏教について考察した。

仏典研究Ⅱ　石井　公成

コンピュータ教場で検索機能を利用することにより、語法に注意しつつ初期仏教の漢訳を講読。

仏典研究Ⅲ　袴谷　憲昭

源信『大乗対倶舎抄』の講読を、日本における仏教思想の展開を検討していくという大きな目標の一環としておこなっている。続講ではあるが、平成十七年度には、「界品」第二十三頌より「根品」第八頌までの「対本頌弁義」を講読した。

宗学演習　角田　泰隆

『正法眼蔵』「発菩提心」巻を研究した。前期は、図書館にて研究ノートの作成。後期は、その成果を発表してもらい、演習形式で講読。

仏教思想演習　袴谷　憲昭

日本における仏教思想の展開を検討していく上で、法相宗の根本典籍である『成唯識論』の研究を欠かすことはできない。平成十七年度から、その意味での初心に返り、新導本によって『成唯識論』を巻第一より読み始めた。十七年度は、巻第一の「破無対」まで読了した。

中国仏教演習　奥野　光賢

凝然『八宗綱要』をテキストとして、仏教の歴史と教理を演習形式で概説。昨年度は「法相宗」「成実宗」の項の講読。

インド・チベット仏教演習　木村　誠司

顕教に関するツォンカパの見解を考察した。前期は中観、後期は唯識を扱った。

仏教文学演習　石井　公成

『金雲翹』『金鰲新話』など、中国・朝鮮・日本・ベトナムの仏教文学作品を諸国間の影響・流布に留意しつつ講読。

禅籍講読　石井　公成

禅宗史の流れに注意しつつ『趙州録』を講読。

日用経典概説　奥野　光賢

前期は仏教教理史を概説しながら主要な大乗経典に対する解説。後期は曹洞宗に

おいて日頃読誦している経典（教典）・語録等を概説。主として『修証義』「発願利生」を中心的に扱った。

仏教伝道　角田　泰隆

前期は、釈尊の伝記を学びながら仏教伝道の基本的あり方について考え、後期は、宗門寺院における伝道の具体相、特に葬祭儀礼について、その意義を概説。

中国仏教史　奥野　光賢

中国仏教の形成過程を主として教理に力点をおいて概説。教科書として鎌田茂雄『新中国仏教史』（大東出版社）を使用した。

日本仏教史　袴谷　憲昭

平成十七年度に限り、仏教学部で開講の「日本仏教文化史」と同内容とし、

「文化構造の解釈」「日本古来の文化」「呉音漢音と文化」「美術中の仏教観」「自利利他の問題」「太子信仰の背景」「大仏建立の理念」「学問仏教の実態」「勧進聖と修験道」「仏教と神祇信仰」「大乗戒壇の建立」「一乗三乗の論争」「密教と祈祷仏教」「本覚思想の定着」「浄土信仰の諸相」「法華信仰の諸相」「禅宗と五山文学」「神仏習合の諸相」「鉄砲と吉利支丹」「幕府の宗教政策」「江戸文化と仏教」「維新と廃仏毀釈」「近代より現代へ」「戦後と民主主義」の主題の順に講義した。

日本禅宗史　角田　泰隆

前期は、インド・中国・日本に及ぶ禅の流れ、および禅思想の特徴について概説。後期はこれを踏まえて日本の禅宗の歴史、特に臨済宗史について講義。

仏教と文化　木村　誠司

『チベットの死者の書』に関する文化的・思想的影響について考察した。

外国語仏書演習　袴谷　憲昭

B.R.Ambedkar,*The Buddha and His Dhamma* を彼の基づく仏典そのものも吟味の対象に加えながら講読した。

坐禅　角田　泰隆

前半は只管打坐、後半は『正法眼蔵』「坐禅儀」と『普勧坐禅儀』の提唱。

〔全学共通科目〕

仏教と人間（短大仏教科）　角田　泰隆

前期は、宗教の概念および世界の宗教について概説し、後期は仏教の基本的な教義について解説。

【他学部開講科目】

〔大学院〕

修士課程・仏教学特講Ⅱ　石井　公成

法蔵『華厳経旨帰』を講読。

〔仏教学部〕

朝鮮仏教史　石井　公成

仏教伝来から現代に至るまで、朝鮮半島の仏教の歴史を概説。

坐禅Ⅰ　角田　泰隆

前半は只管打坐、後半は坐禅に関する両祖の撰述の提唱。

日本仏教文化史　袴谷　憲昭

平成十七年度に限り、短大仏教科で開講の「日本仏教史」と同内容とし、同じ二四の主題を、「序　仏教伝来以前の文化」「第一章　中国朝鮮の影響下の仏教文化」「第二章　南都の学問仏教と民衆の文化」「第三章　日本独自の文化形成と仏教観」「第四章　中世の仏教信仰の確立と変容」「第五章　近世と近代の社会文化と仏教」「結　現代社会と仏教文化」の大枠の下で講義した。

仏教特講Ⅳ　奥野　光賢

『大般泥洹経』を『大般涅槃経』と対照させながら講読した。

〔短期大学〕

仏教と人間（国文科前半）　奥野　光賢

松本史朗著『仏教への道』（東京書籍）を教科書として、仏教の基本的教義を概説しつつ、仏教の人間観について考察した。

仏教と人間（国文科後半）　木村　誠司

前期は仏教の基本的知識を学び、後期は日本文学における仏教の影響を考察した。

仏教と人間（英文科前半）　石井　公成

世界の主要な宗教、および仏教の教理と歴史について概説。

仏教と人間（英文科後半）　袴谷　憲昭

拙著『仏教入門』を教科書として、我が国に定着してしまったかに見える非仏教的な考え方を反省しながら、仏教の基本的思想について説明した。

◇教員研究活動

石井　公成

〔論文〕

「近代の日本・中国・韓国における『大乗起信論』の研究動向」（『禅学研究』特別号、二〇〇五・七）

「どのような日本をどの位置から見るか」（『日本思想史学』三十七号、二〇〇五・九）

「馬祖における『楞伽経』『二入四行論』の依用」（『駒澤短期大学仏教論集』十一号、二〇〇五・十）

「親鸞を讃仰した超国家主義者たち（二）―木村卯之の道元・親鸞比較論―」（『駒澤短期大学研究紀要』三十四号、二〇〇六・三）

「変化の人といふとも、女の身持ち給へり―『竹取物語』の基調となった仏教要素―」（『駒澤大学　仏教文学研究』九号、二〇〇六・三）

「馬祖与《楞伽経》、《二入四行論》」（中文、林鳴宇訳、『佛学研究』二〇〇五年十四期、北京、二〇〇六・三）

〔小文〕

「『金雲翹』の変奏」（『文学』二〇〇五年十一・十二月号、岩波書店）

〔発表〕

「馬祖与《楞伽経》《二入四行論》」（馬祖与中国禅文化学術研討会、中国四川省什邡市、二〇〇五年八月二十六日）

「Trends in Modern Day Research on the *Awakening of Faith in Mahāyāna* in Japan, China, and Korea」（AAR 2005 Anual Meeting 'Philadelphia' 二〇〇五年十一月二十二日）

奥野　光賢

〔研究動向〕

「天台と三論―『法華文句の成立に関する研究』刊行二十年に因んで―」（『駒澤短期大学仏教論集』第十一号、二〇〇五・十）

〔論文〕

「吉蔵撰『浄名玄論』巻第一の註釈的研究」（『駒澤短期大学紀要』三十四号、二〇〇六・三）

〔発表〕

「禅那院珍海の研究（序説）」（東アジア仏教研究会二〇〇五年度年次大会、二〇〇五年十二月三日、於駒澤大学二四六会館）

〔出張〕

第四回グレート・ブッダシンポジウム

（二〇〇五年十二月十日～十一日、於東大寺金鐘会館）
二〇〇六年度日本仏教綜合研究学会大会（二〇〇五年十二月十八日、於愛知学院大学）

木村　誠司
〔論文〕
「唯識文献における三性と三相について」（『駒澤短期大学仏教論集』第十一号、二〇〇五・十）
「世親の如来蔵思想」（『駒澤短期大学研究紀要』第三十四号、二〇〇六・三）

角田　泰隆
〔論文〕
「坐臥の脱落」（『駒澤短期大学仏教論集』第十一号、二〇〇五・十）

袴谷　憲昭
〔著書〕
『日本仏教文化史』（大蔵出版、二〇〇五・十二）
〔論文〕
「〈八種施〉考」（『駒澤短期大学仏教論集』第十一、二〇〇五・十）
「"Brāhmanadhammika-sutta"の比較研究」（『駒澤短期大学研究紀要』第三十四号、二〇〇六・三）

【公開講演会】
二〇〇五年十一月十六日　午後六時
演題　『正法眼蔵』はいかに編輯されたか
講師　愛知学院大学教授　伊藤秀憲先生

◇研究テーマ提出者（平成十八年度）

仏教科二年
寺島　良純　「業論の考察」
清水喜久子　「法華経の菩薩行―法師について」
種子　知紀　「明治時代以前と以後の仏教の違い」
川崎　一之　「禅と心」
三吉　瑛輝　「曹洞宗の両祖の生涯」
茂田　孔淳　「曹洞宗の歴史とその教義の特色」
梅本　晃代　「女性と仏教―最初の出家者善信尼について」
吉岡　見淳　「『修証義』による教化」
岸　徹　「原始仏教と現代仏教―仏教はいかに変貌したか―」
杉本　佳哉　「道元禅師の坐禅」
浜野　修雄　「仏教の変遷―インド仏教と日本仏教―」
高橋　昭夫　「曹洞宗の宗義と歴史」
吉村　綾輔　「仏教とは何か」
田中　琢磨　「ブッダと輪廻」
玉井　宏忠　「中観思想に於ける縁起と自性の矛盾関係―二重構造の解体―」
松井　量孝　「道元禅師の学道観」
飯尾　芳寛　「禅における戒律の研究」
松本　好寛　「宗教学上における仏教の位置」
石井　章仁　「曹洞宗における社会福祉の思想と歴史的変遷について」
石龍　泰晃　「中国から日本への仏教伝来―『阿毘曇五法経』について―」

◇平成十八年度短大仏教科在学生

仏教科二年
寺島　良純　　清水喜久子
種子　知紀　　増澤　稔人

鈴木　博仁　　多田加代子
長田　肇　　川崎　一之
澤野　武夫　　三吉　瑛輝
茂田　孔淳　　梅本　晃代
吉岡　見淳　　岸　徹
小山田光樹　　中水　了
杉本　佳哉　　浜野　修雄
高橋　昭夫　　吉村　綾輔
佐々木　誠　　田中　琢磨
井橋　幸重　　鈴木　泰真
小柳　富　　倉島　智行
田中　悠琢　　奥山　良栄
鄉闘森　康　　乙川　裕太
玉井　宏忠　　松井　量孝
飯尾　芳寛　　大村　豊伸
竹内　祥雄　　松本　好寛
渡邊　慧良　　井上　翔太
熊谷　晃生　　石井　章仁
岡部　良行　　石龍　泰晃

◇諸係担当（平成十七年度）

短期大学仏教科主任　　木村　誠司

○学内諸係

全学教授会委員　　木村　誠司

自己点検・評価委員　　石井　公成
体育審議会委員　　石井　公成
教員人事委員会委員　　石井　公成
図書館委員　　奥野　光賢
図書館選定委員　　奥野　光賢
紀要編集委員　　奥野　光賢
宗教教育運営委員　　奥野　光賢
学園通信発行委員会委員　　袴谷　憲昭
情報システム委員会委員　　袴谷　憲昭
禅文化歴史博物館委員　　角田　泰隆

○学科内諸係

自己点検・評価実施委員　　専任教員全員
論集編集委員　　奥野　光賢
会計・庶務　　角田　泰隆

執筆者紹介（掲載順）

伊藤　秀憲（愛知学院大学教授）
袴谷　憲昭（仏教科教授）
岡本　一平（仏教科非常勤講師）
須山　長治（仏教科非常勤講師）
奥野　光賢（仏教科教授）
下室　覚道（仏教科非常勤講師）
角田　泰隆（仏教科教授）
松田　和信（佛教大学教授）
池田　道浩（仏教科非常勤講師）
石井　公成（仏教科教授）

編集後記

▽『駒澤短期大学仏教論集』第十二号をお届けいたします。駒澤短期大学は平成十八年度より新規の学生募集を停止し、在学生の卒業をもって廃止されることが決まりました。これに伴い残念ながら本論集も今号が最終号ということになりました。第十二号をもって最終号となることに言いようのない寂しさと感慨を覚えます。特に意図したわけではありませんが、巻頭には伊藤秀憲先生による昨年度の仏教科公開講演会「『正法眼蔵』はいかに編輯されたか」を掲載することができました。第十二号と十二巻本『正法眼蔵』、これも何かの因縁なのかもしれません。ご多忙の中、本論集のためにご尽力いただいた伊藤先生には厚く御礼申し上げます。

▽佛教大学の松田和信先生には、袴谷憲昭先生のご著書『唯識思想論考』の書評をお寄せいただきました。これは本論集が最終号を迎えるということで、昨年中に木村誠司先生が特に松田先生にお願いして実現したものです。約束に違わず原稿をご送付下された松田先生には心よりの御礼を申し上げます。

▽短大仏教科は平成七年に学科として独立し、本論集も同年に刊行が開始されました。第一号創刊時の意気込みとやや高揚した気分を想うといささか感傷的にもなってきます。しかし、冷静になって振り返ってみると、もうすでにその頃から短大の将来については危惧の念が表明されており、種々の議論が開始されていました。そして、結局のところ、短大問題は上記のような結論となりました。いわゆる少子化とそれに伴う十八歳人口の減少により、まもなく大学は「全入の時代」に突入するといわれています。大学のバブルが終焉し、夢から覚めてみたらかかる事態になっていたといっては言い過ぎでしょうか。まさにいま短大のみならず大学全体が正念場にさしかかったといえるのでしょう。

▽学科独立以来、本論集を刊行するために専任教員五名の他、非常勤講師の諸先生にも多くのご協力をいただきました。ここに改めて感謝申し上げます。少ない人数で毎年、論集を刊行することはある意味では大変でもありましたが、またある意味ではそれが研究の励みでもありました。その意味でも本論集がなくなることは残念の極みですが、本論集を土台に次の舞台に飛躍したいと思います。

▽短大仏教科を誰よりも愛し、誰よりも大切にされてきた前主任の木村誠司先生が昨年末、病に倒れられ現在もなお入院中です。短大問題で過重なご負担をおかけしていたのではないかと心が痛みます。木村先生の一日も早いご快癒を切にお祈りします。

▽終わりに駒澤短期大学仏教科の卒業生、在学生の皆さんの益々の発展を祈念し、本論集最後の「編集後記」とします。

（編集係　奥野光賢）

駒澤短期大学仏教科
仏教論集　第十二号
二〇〇六年十月三十一日　発行
発行人　駒澤短期大学仏教科研究室
代表　奥野　光賢
発行所　駒澤短期大学仏教科研究室
東京都世田谷区駒沢一丁目
印刷所　㈱　東　京　技　術　協　会
東京都港区三田四-八-四一